2026年11月1日（日）第577回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」

環境教育の成果と水辺保全の持続的展開

NPO法人グラウンドワーク三島が、日本自然保護大賞（教育普及部門大賞）を受賞した背景と現場での教育実践を詳述し、テレビ番組企画を契機に整備された水辺拠点の維持管理課題と行政支援の必要性、さらに水辺サポーター会員募集と養成講座の計画を具体的に共有した。

日本自然保護大賞の受賞と次世代への環境教育実践

渡辺豊博（ジャンボ）氏は、日本自然保護大賞の教育普及部門大賞受賞を報告、長年の活動が国内トップクラス、世界水準のクオリティとして評価されたと位置づけた。

受賞は34年間で通算35件目にあたり、近年の受賞歴として「グッドデザイン金賞（2025年11月）」「地球倫理推進賞（12月・副賞100万円）」「静岡県景観賞最優秀賞（1月）」を挙げ、成果が「言葉ではなく形として残る」ことの重要性を強調した。

さらに、源兵衛川が「世界かんがい施設遺産・世界水遺産」に登録されている事実や、ブラジリアでの講演実績を紹介、グラウンドワーク三島の活動が、国際的にも認知・評価されていることを解説した。

次世代へつなぐ「バトンタッチ」の重要性が語られ、永続的な個人の関与は、不可能である前提のもと、後継者育成を最後の責務と定義・強調した。

環境出前講座の累積成果として、2014年以降年間約2,800人・延べ44校の指導、裸足で源兵衛川に入り魚取り・野鳥観察・ホタルの学校・草刈り・ゴミ拾い・バイカモの清掃などの体験を通じ、累計約2万5,000人の子どもが五感で自然を学んだことが共有された。

冷水に触れて「痛い」「冷たい」といった感覚の未経験性が変化し、しばらくして「温かい」と言い始める身体反応を含む、心身の活性化効果を具体的に説明した。

大人が感受性の高い場を整え、子どもが行動することで、言葉による説教に頼らずとも、自然から学びが生まれるという教育哲学が示された。

国際的な教育効果の例として、ネパールからの受講生が、帰国後、ゴミ拾い・分別を開始し、受け取った日本の分別マニュアルを AI で翻訳して、即座に運用、現在は 13 種類の分別を実施している事実が紹介された。

来訪した 14 歳の女子生徒の「自然を守ることで互いにも恵みがある」という相互性の理解や、男子生徒の「環境を守る活動に携われて嬉しい」という感想は、現場体験が学習効果を高めることを端的に示すものとして位置づけられた。

水辺再生拠点の現状課題と生態系維持管理の取り組み

テレビ番組「相葉ヒロミのお困りですカー？」（8 月 21 日収録、9 月 24 日放送）を契機に、水の苑緑地の整備が進み、来訪者の急増に伴う経済効果（周辺商店の売り上げ増）と広域的な集客（当初は三島市内、のちに伊豆・静岡、さらに大阪・名古屋・北海道・沖縄へと拡大）が確認された。

一方で、利用増加に伴う維持管理負荷が顕在化し、適切な保全を継続しなければ「恥ずかしい場所」に逆戻りするリスクが明示された。

整備後の具体的な保全作業として、放送翌日の 9 月 25 日以降、渡辺氏および仲間がほぼ毎日現場に入り、1 日 200〜400 人の来訪者へのガイド（最大 700 人で混雑）を行いながら、上流部でのバイカモの移植・清掃、最下流部の古い止水板の交換と高さ調整、乾燥しがちな苔への散水（ジョウロ・バケツ）、竹の新生繁茂への対処として既に 500 本を伐採、公衆トイレ周辺の小川の砂利ひきと清掃、見学デッキ・わかせみ橋の清掃（箒 3 本をすり減らし更新）などを継続している。

生態系面では、整備に投入した砂利に含まれるコンクリート粉の影響で水質がアルカリ性に傾いており、魚類を導入すると死亡する恐れがあるために、水質調査を継続して、中性（pH7〜7.5 付近）への改善を目指している（現在 pH は約 8）。

ホタルの生息には、池沿いの法面への柔らかい土の投入などの環境整備が必要であり、カワセミの回帰（4 羽確認）というポジティブな変化が見られる一方、竹藪の伐採により人が侵入しやすくなったことで、撮影者や観光客がカワセミの近くに、立ち入って逃避させたり、苔上を走って踏圧破壊を招いたりする事例が発生している。

さらに、池へ立ち入り、タモで遊ぶ親子（主に三島市民）による攪乱が複数回確認され、注意喚起を行っているものの、既存の「立入遠慮」看板が無視される状況がある。

こうしたマナー違反は、鳥類との共生や淡水魚（例：アブラハヤ、トオヨシノボリ等）の再導入、ホタルの飛翔環境の維持に深刻な影響を与えうるため、専門的視点に基づく、ルール設計と現場管理が不可欠とされた。

渡辺氏は、豊岡三島市長への受賞報告の場で、来年4月以降の水の苑緑地の維持管理経費として100万円の補助を要請した。

道具・人員・時間の投入が継続的に求められることを説明し、行政の役割を喚起した。

また、番組側の一年後の「選抜3か所の突然訪問」企画を念頭に、ホタルシーズンの5月を見据えた半年以上の継続整備の必要性を市民に共有し、次回放送時に「水の都・三島」にふさわしい、素晴らしい環境を保てるように協力を呼びかけた。

水辺のサポーター会員募集と人材養成講座開催の計画

持続的な保全体制構築のために、源兵衛川「水辺のサポーター」会員募集を実施中である。

会費は不要、名前とメールアドレスの登録を求め、平常は、木曜日9:30の定例作業、土曜日での臨時活動、日曜日のホタル鑑賞会、ルールに基づく野鳥観察会など、多様な行事をメールで案内する。

現在の登録者は約100名で、さらなる増員を目指している。

個人での清掃も歓迎だが、苔・水辺動植物を損なわないための「やってはいけないこと」を含む、基本ルールの事前習得が推奨される。

加えて、単なる清掃にとどまらず、環境保全の作法・思想や現場の本質（光と影の両面を理解する姿勢）、環境デザインの意義、源兵衛川の価値・魅力、世界かんがい施設遺産登録の背景、動植物（鳥・トンボ・魚）の生態を体系的に学ぶ全8回の「養成講座」を開講。

1回のみの参加も可で、途中退席も柔軟に認めるなど、敷居を下げた運用が特徴。

初回は10月31日15:30から、三島市民文化会館会議室で開催、参加希望が事務所のキャパシティを超えたため会場変更、40 人規模での開催になった。

続いて11月4日（水曜・15:30）に実施予定で、以降は、グラウンドワーク三島のホームページで、随時、養成講座のスケジュールが告知されることが示された。